

1980年代初頭における在日コリアンを対象とした外国人教育の特質

—「外国人教育の基本方針(試案)」(1981年)と京都市立陶化小学校の校内研究—

磯田 三津子 埼玉大学教育学部学校教育臨床講座

キーワード：外国人教育方針、外国人教育、在日コリアン、多文化教育

1. はじめに

外国人教育は、在日コリアン(以下、在日と称す)への差別撤廃をめざして1970年代にはじまった教育実践である。その教育実践は、自治体が策定した「外国人教育方針・指針」に基づいて、西日本の公立学校を中心に今日まで継続されてきた。京都市は、1981年に「外国人教育の基本方針(試案)」(以下、「試案」と称す)を策定してから、今日まで外国人教育を行ってきた自治体のひとつである。その中でも注目すべきであるのは、「試案」策定後、間もなく外国人教育に取り組んだ京都市立陶化小学校(以下、陶化小と称す)である。陶化小は、在日の集住地域に所在し、「試案」が策定された1981年に校内研究として市内ではじめて外国人教育に取り組んだ小学校である。陶化小の校内研究では、韓国・朝鮮の民話、遊び、日朝関係史が外国人教育のための教材として開発された。これらの教材は今日の外国人教育においても用いられている¹⁾。

1970年代から1980年代の在日をめぐる問題には、貧困、不就学、低学力、民族差別による日本人と在日の人間関係の不和といった問題があった。こうした在日をめぐる問題が明らかにされる中、陶化小の教師は、日本人と在日の間に民族差別のない関係を築くことに焦点を当て、韓国・朝鮮の文化や、日朝関係史を学ぶことを通して他者を承認する基礎となる知識を得るための実践を行った。陶化小の校内研究は、京都市の外国人教育の原点であり、今日も用いられている教材の開発や授業実践が展開された。しかし、これまでの京都市を対象とした外国人教育に関する先行研究は、在日の子どもたちを対象とした民族教育に関する議論が主であり、民族差別を排除し、日本人と在日のより良い関係を構築するためにどのような取り組みを行ってきたのかについて詳細に論じられていない(中島 1981年、松下 2004年)。

以上の課題意識に基づいて、本論では、次の二つの研究目的を設定した。第一は、民族の違いによる蔑視やいじめの排除をめざして取り組まれた陶化小の外国人教育の特質を教材と教育内容の観点から明らかにすることである。第二は、陶化小の外国人教育の成果と限界を明らかにし、これからの外国人教育の在り方について提案することである。以上の目的を明らかにするために、本論は、以下の手続きに従って論を進める。第一は、「試案」策定までの経緯を通して、校内研究が行われた背景を明らかにすること、第二に、「試案」で明らかにされた外国人教育の目的に基づいて、陶化小で開発された合計82の指導計画を分析し考察すること。第三に、多文化教育の理論に基づいて、陶化小の校内研究の成果と限界を明らかにし、これらの外国人教育の課題を提案することである。多文化教育は、米国をはじめとする多民族国家で誕生した考え方である。外国人教育では、これまで、オールドカマーである在日やニューカマーの子どもたちとの共生を目指す教育実践が行われてきた。従って、日本人と在日の共生の教育の在り方について、先駆的な理論を明らかにし

てきた多文化教育の理論に依拠することは本論において適切である。

2. 陶化小学校の校内研究開始までの背景

外国人教育の校内研究が行われていた1982年における陶化小の在籍児童数は約530名であり、そのうちの約200名が在日であった（小栗栖、1982、p.24）。当時、在日は、貧困、不就学、問題行動、いじめといった課題を抱えていた。ところが、陶化小で外国人教育が行われるまで、公立学校では、これらを補導問題として捉え、民族差別の観点から、それらの問題を解決するための取り組みを行っていなかった。

公立学校の日本人教師が在日の子どもに組織的にかかわるようになったのは1955年の都立朝鮮学校が廃止されて以降のことである（松下、2004、p.125）。1970年代まで日本人教師の役割は、在日の子どもを朝鮮学校の門まで連れていくことであり、公立学校で在日に関わる問題にいかに取り組みべきかについて明確な方向性は示されていなかった（松下、2004、p.125-129）。一方で、1979年の調査によると、京都市における在日の公立学校入学率は85.4%であり、民族学校に行くことを選択しない在日の子どもや、民族学校に通わせない保護者は多かった（松下、2004、pp.125-126）。このように多くの在日が公立学校に通っているのにも関わらず、彼らに対する教育の在り方があいまいなまま日本人と同じ教育を行うという実態を生み出していた²⁾。

公立学校で外国人教育が具体化される契機は、1970年代の在日に対する差別をめぐって各地で起こった市民運動にある。こうした市民運動は、1960年代の部落解放運動の影響によって起こり、在日の国籍、在留資格、就職、教育等における差別問題に取り組まれた（稲富著、中村編、2008、pp.45-46）。教育における注目すべき動向は、大阪で1971年に「公立学校に在席する在日朝鮮人児童・生徒の教育を考える会（考える会）」（以下、「大阪・考える会」と略す）の結成準備集会が開かれたことである。「大阪・考える会」は、在日に対する排除・差別意識に対する教師の責任とその克服をめざして組織された（稲富著、中村編、2008、pp.50-51）。

京都市においても、1970年代より、在日の集住地域における若者による市民運動をはじめ、在日の暮らしや教育に対する改革運動が顕著となった³⁾。京都市の外国人教育発足の直接のきっかけは、韓国学園（現・京都国際学園）の移転反対に対する市民運動である⁴⁾。韓国学園をめぐる市民運動で活動した人々は、「日本人の民族差別・排外意識を日本人の手で具体的に変えていこう」をモットーに在日の教育における差別を日本人によってなくす意思を次第に共有していった⁵⁾。「大阪・考える会」に続き、この市民運動に携わった人々は、「京都在日韓国・朝鮮人児童生徒の教育を考える会」（以下、「京都・考える会」と称す）を組織した。「京都・考える会」は、行政との交渉を通じて「試案」の策定に導いたのである⁶⁾。

他方で、当時、陶化小教諭であった小栗栖直樹は、市民運動と連動しながら教師中心の研究会「考える教師の会」を立ち上げた。「考える教師の会」は、「京都・考える会」と「大阪・考える会」の活動が相まって発足した外国人教育の必要性を共有する教師の会であった。当初、「考える教師の会」のメンバーは、5、6名と小規模であった。定例会では、例えば、高麗美術館の創立者である鄭詔文（チョンヂョムン）、地域の在日の町内会長等を講師として招いた定例会を自費で行い、韓国・朝鮮の文化について、そして在日が直面している問題について学ぶ機会を設けていた⁷⁾。こうした「考える教師の会」の定例会を契機に、京都市の公立学校の教師は、在日に対する差別の実態を把握し、韓国・朝鮮の文化を教えるための活動を開始したのである。

校内研究が開始する前年度の1980年、陶化小では外国人教育が提案され、その実践が少しずつ開始されていた⁸⁾。そして、「試案」が明らかにされた1981年には「人権尊重の精神に基づき、民族に対する偏見や差別をなくし、外国人児童の民族的自覚の素地を培い、すべての児童に人権の尊さと国際理解の精神を養う」ことを基本的な考えとして、研究主題「外国人教育を通して、みとめあい、自らを高める子に」を設定し校内研究を開始した。その具体的取り組みは、研修の充実、素地指導（民族的自覚を育て、差別・偏見を除去する基礎内容）にかかわる指導計画の作成、環境整備の充実でありその中でもカリキュラム開発と授業実践に研究の重きを置いていた⁹⁾。こうした研究課題に基づいて開発されたのが本論で分析対象とする指導計画である。

3. 「試案」に基づく陶化小の外国人教育の検討

陶化小では、1981年度から1983年度にかけて行われた校内研究において82の指導計画を開発した。本章では、校内研究で開発された82の指導計画を「試案」の内容に基づいて考察し、校内研究における外国人教育の特徴

を明らかにする。「試案」では、次の二つが外国人教育の目標として設定された。それは、(1)「外国人児童・生徒の民族的自覚の基礎を培う」、(2)日本人児童・生徒の民族的偏見を除去し、国際協調の精神を養う」である。さらに、「試案」では、(1)外国人児童・生徒、(2)すべての児童・生徒、(3)保護者の三者を対象に、前掲した目標に対応する内容を記した。その内容は、表1『「試案」の目標と分析の視点』の通りである。本論では、

表1 「試案」の目標と分析の視点

(1) 外国人児童・生徒
①在日の民族としての歴史的社会的立場を認識する、
②自ら進路を切り開き、課題解決する能力を育成する。
(2) すべての児童・生徒
①日朝関係史を通して差別の背景を理解する、②差別の現状を知り、差別をなくす態度を育てる、③他の民族の伝統・文化を尊重し、相互を尊重し合う態度を育てる。
(3) 保護者
①民族差別の不当性を知り、差別を排除するための認識を高める。
*『外国人教育の基本方針(試案)』1981年、外国人教育研究推進委員会、p.5を基に作成。

陶化小の外国人教育の特徴を明らかにするために、表1の(1)「外国人児童・生徒」、(2)「すべての児童・生徒」の中に記されたそれぞれの内容を分析視点として指導計画を考察する。資料「陶化小学校の外国人教育(1981年から1983年)」は、分析した結果をまとめたものである。資料にあげた82のうち、55の指導計画が(2)「すべての児童・生徒」③「他の民族の伝統・文化を尊重し、相互を尊重し合う態度を育てる」に関連する内容であった。その中でも、日本と韓国・朝鮮の共通点を知ることで、韓国・朝鮮の文化に親しみを持たせようとする指導計画が14ある。日本と韓国・朝鮮の交流を学習内容としたものは、10の指導計画である。その他の31の指導計画は、韓

表2 学年と教科ごとの分類

	国語	社会	図工	音楽	家庭	道徳	学活
1年	6	4	1	1	—	1	0
2年	3	3	1	1	—	2	1
3年	4	2	1	2	—	2	4
4年	4	2	1	1	—	0	3
5年	4	5	2	0	0	0	1
6年	2	14	2	0	1	0	1
合計	23	30	8	5	1	5	10

国・朝鮮独自の文化の面白さを民話、歌、絵などを通して知ることを目指している。こうした指導計画は、外国人教育の素地指導としてすべての教科、特別活動の中に取り入れるべきであることが指示された。(2)「すべての児童・生徒」③「他の民族の伝統・文化を尊重し、相互を尊重し合う態度を育てる」に当てはまった55の指導計画は、教室内の日本人と在日の人間関係の改善をめざして構成されたと考えられる。それでは実際、指導計画を開発した教師は、どのような問題を捉えていたのか、陶化小の元教師小栗栖直樹は次のように述べている¹⁰⁾。

試案によると、外国人教育は、民族差別をなくする教育であると唱えている。そして、日本人児童から差別・偏見を除去し、朝鮮人児童（韓国籍も含む）には、民族的自覚の基礎を培うことを目指している。しかしながら、過去から現在に至るまで、児童の間で、差別的な言動があったり、深刻ないじめもおこっているのが実態である。

このように、学校現場では、日本人と在日の子どもたちの間の問題が深刻化しており、日本人の在日に対する差別的な発言や、在日の子どもが集団化し問題を起こすといった課題を抱えていた。82のうち55の指導計画が(2)「すべての児童・生徒」③「他の民族の伝統・文化を尊重し、相互を尊重し合う態度を育てる」の内容であった背景には、小栗栖が述べた通り、クラス内での在日と日本人との関係の改善が重要課題であったからであると考えられる。表2「学年と教科ごとの分類」にあるように、陶化小の実践の中心は、国語と社会である。国語では、日本民話や物語の単元に朝鮮民話を取り入れ、日本の民話との共通点を学ぶことや民話に描かれた独特の世界を知ることによって、韓国・朝鮮に対する否定的なイメージを克服することを目指していた。社会では、低学年において韓国・朝鮮と日本の暮らしの違い、産業の共通点、織物・染色等の伝統産業の交流を学ぶことで韓国・朝鮮を身近に感じることを目的とした実践が行われた。

陶化小の外国人教育で特徴的であるのは、6年社会に(2)「すべての児童・生徒」①「日朝関係史を通して差別の背景を理解する」学習を位置付けたことである。こうした日朝関係史と在日の現在を関わらせた学習には、(1)「外国人児童生徒」①「在日の民族としての歴史的社会的立場を認識する」の目標を具体化した実践もある。この指導計画では、韓国併合、創始改名を通して、なぜ、在日が日本にいるのか、本名を名乗れないのかについて理解できる内容となっている。この学習を通して、日本人の子どもが在日の置かれている状況とその背景を知ると共に、在日の子どもが自分自身のルーツについて理解を深めることもできる内容である。資料には、分析結果の中に「その他」の欄を設けた。「その他」に分類した20のうち6事例が戦争に関わる内容を扱っていた。その他の7事例は、「やさしさの大切さを知る」や「先入観や外見だけで人を判断しないようにする」といった韓国・朝鮮の文化や歴史と関連しない内容についての学習であった。

以上から、陶化小の外国人教育の特徴は、次のように三つにまとめることができる。第一は、陶化小の外国人教育がすべての子どもに対して行われているものであり、在日と日本人の子どもの双方が、韓国・朝鮮に対するネガティブな意識を改善することを目指す内容を構成していたことである。第二は、韓国・朝鮮に対する肯定的な意識を形成するために、民話、暮らし、産業、音楽等の共通点と相違点、あるいは日本と韓国・朝鮮の交流関係が学習内容とされていたことである。第三は、日朝関係史を通して在日自身が日本で暮らすことや日本名を使うことの意味について理解できる内容を設定していたことである。

4. 陶化小の外国人教育と「人間関係」に関するアプローチ

本章では、校内研究で開発された典型的な三つの指導計画を抽出し、教材と内容を検討することを通して、陶化小の外国人教育の成果を明らかにする。そのために、ここでは、多文化教育の理論を用いる。多文化教育は、多民族国家である米国やオーストラリアといった国々で発展した考え方であり、マイノリティに対する差別や偏見を排除し、多様な人々と共に共同体を創造できる知識と技能を育成するための教育的戦略である。この考え方は、近年、日本の教育においても、在日の文化や歴史の伝承を要求する人々、ニューカマーの子どもたちの教育に取り組む教師等によって用いられている¹¹⁾。

グラントとスリーターは、多様な文化的背景の子どもたちで構成された教室における教育実践を「例外的な子どもと文化の異なる子どもの指導」(Teaching the Exceptional and the Culturally Different)、「人間関係」(Human Relations)、「単一集団についての学習」(Single-Group Studies)、「多文化教育」(Multicultural Education)、「多文化的な社会公正を目指す教育」(Multicultural Social Justice Education)の五つに分類している(Grant and Sletter, 2010, pp.62-69)。陶化小の外国人教育は、その中でも、「人間関係」と呼ばれる実践との共通点が多い。「人間関係」は、1970年代以降、米国やヨーロッパの国々でも行われてきた(Sleeter & Grant, 2009, pp. 86-87)。スリーターとグラントによると、このアプローチの目的は、「生徒間の肯定的な感覚を創造し、偏見を軽減すること」である(Sleeter & Grant, 2009, p.85)。ジョンソンとジョンソンは、多文化教育と「人間関係」に関する著書の中で、その目的を(1)すべての人々が個々の多様な価値を認め尊重することを学ぶことで偏見や差別を排除し、マジョリティとマイノリティの関係を改善すること、(2)多様な人々との相互関係に参加する能力を育てることであると述べている。つまり、「人間関係」は、偏見や差別を排除することでマイノリティとマジョリティの関係を改善するものであり、多様な人々と協働できる知識と技能を育てることを目標とした実践なのである。陶化小の指導計画は、こうした目的と共通している。本章では前述した陶化小で開発された82の指導計画の中から外国人教育の典型的な事例である(1)1年「おむすびころりん(トラよりこわいくしがき)」、(39)3年「学級指導・本名を大切にしよう」、(71)6年「社会・『近代の日本』(日清・日露の戦争)」を取り上げ「人間関係」のアプローチの観点から考察する。

(1)1年国語「おむすびころりん(トラよりこわいくしがき)」の単元における外国人教育の教材は、朝鮮民話「トラよりこわいくしがき」である。実践者は、日本民話「おむすびころりん」の単元の最後に「トラよりこわいくしがき」を教材とした指導計画を作成し、44名中14名が在日というクラスで実施した¹²⁾。14名の中には、自分自身が在日であることを知っている子どももいる。ところが、日本人は韓国・朝鮮については詳しく知らない。そこで、実践者は、朝鮮について肯定的なイメージを与えることを意図し実践した。教師は、韓国・朝鮮の情報として「韓国は日本に一番近い国であること」、「朝鮮という名称について」、「朝鮮の民話にはトラが多く出てくること」を知らせる¹³⁾。そして、日本にも韓国・朝鮮にも民話があるという共通点を通して、韓国・朝鮮に親しみを持たせている。

この指導計画は、子どもたちが描く韓国・朝鮮についてのネガティブなイメージを修正し、日本人と在日の子どもたちの関係の改善を意図している。その中で、子どもたちは、偏見を軽減し、生徒の間の肯定的な感覚を形成することができる。そして、この指導計画で注目すべきであるのは、

「日本と同じように韓国・朝鮮にも民話がある」、「日本と韓国・朝鮮には同じような言い伝えがある」といった共通点を強調していることである。共通点を知らせることは、韓国・朝鮮の文化が日本より劣っているというような感覚を修正することができる (Sleeter and Grant, 2009, p.103)。この事例のように、陶化小の指導計画は、韓国・朝鮮に対するイメージの転換を意図する実践が中心である。特に低学年における外国人教育は、韓国・朝鮮に対するより良いイメージを印象付けることを目的とした実践が行われていたことが特徴である。

次に、(39) 3年「学級指導・本名を大切にしよう」について考察する。この実践は、在日の子どもが、本名を名乗れない状況を克服することを目的としている。教材は、韓国・朝鮮の100の姓一覧表「全朝鮮の多い姓とその読み方」と、韓国併合の当時を舞台とした物語「本名について—なぜ、朝鮮人に2つの名前があるのか」である。この物語は、日本人の役人と3人の韓国・朝鮮人が登場し、そこで日本名を強要される様子が描かれている。授業は、「もし、あなたが、金さん、朴さん、崔さん、鄭さんだったらどんな思いでしょうか」、「朝鮮人は、自分の本名のことを、どう思って生きてきたのでしょうか」の二つの発問を通して授業が展開される¹⁴⁾。この発問から、この指導計画が日本人の子どもの意識を変えることを対象として構想されたと考えることができる。小学1、2年のとき、在日の子どもたちは、外国人教育の実践や民族学級の内容を知る活動を通して、韓国・朝鮮に対する良いイメージを形成する活動を行ってきた。その成果として、出自を明らかにしたい、本名を知りたいという在日の子どもも現れる¹⁵⁾。一方、日本人の子どもは、在日の本名を聞き慣れなさからからかうこともある¹⁶⁾。この指導計画では、姓の響きに馴染むこと、そして日本の姓を名乗る原点が韓国併合にあることを学び、級友が本名を名乗ったとき、違和感なく受け入れることができることをめざしているのである。

この指導計画の特徴は、本名を名乗れない辛さについて、当時の韓国・朝鮮人の立場に立って考える活動を取り入れていることである。このように、他者の経験について擬似体験することのできる活動によって、人々の社会的距離を縮小させ、共感性を高めることができる (Sleeter and Grant, 2009, p.109.)。「人間関係」のアプローチにおいて、グラントとスリーターは、異なる文化集団の経験を疑似体験することによって、彼らが抱える問題を知ることができるのと同時に、偏見を軽減することができると述べている (Sleeter and Grant, 2009, p.109)。この論に従えば、陶化小で行われた韓国・朝鮮人の経験について考える活動は、彼らへの共感的な理解を促すだけではなく、在日と日本人の社会的距離を縮小することもできる。

最後に (71) 6年「社会・『近代の日本』(日清・日露の戦争)」について考察する。この指導計画は、日清・日露戦争を経て韓国併合へと至る歴史についての学習である¹⁷⁾。この指導計画は、12時間で構成される単元「近代の日本」の中の韓国併合についての2時間の授業である。この指導計画では、反日義兵団の行動や反日運動の回数・人数などの資料を教材として用い、民衆の抵抗の様子について理解を深める内容が設定されている。日清・日露戦争における日本の勝利に注目するのではなく、韓国併合によって多くの韓国・朝鮮人が日本にわたったこと、そして日本名を名乗る原点が創氏改名にあることを通して、在日の歴史に発展させる内容を構成していた。この指導計画は、日本人の子どもに、在日が日本にわたってきた原点となるのが韓国併合であることを知らせる。こうした知識は、差別的な状況に置かれてきた在日を歴史的に理解し、今日の差別を考える重要な手掛かりとなる。またこの実践は、在日の子どもにとっても意味がある。自分自身についての肯定的な意識がないと、人々は、その民族同士の良好な関係を築こうとしない (Sleeter and Grant, 2009, p.98)。在日同士の肯定的な関係を築くためにも、なぜ、在日が日本で暮らす

ようになったのかその歴史的経緯について適切な情報が必要なのである。

5. 陶化小の外国人教育の成果と限界—新たな学校文化の構築に向けて

陶化小の校内研究では、韓国・朝鮮の文化と日朝関係史の学習を通して、在日に対する偏見を軽減し、日本人とのより良い関係を構築することを目的とした指導計画を構想していた。これらの実践は、校内研究の重要な成果として評価することができる。しかし、陶化小の外国人教育には限界もある。それは、「試案」の目標(1)「外国人児童生徒」②「自ら進路を切り開き、課題解決する能力を育成する」と、(2)「すべての児童・生徒」②「差別の現状を知り、差別をなくす態度を育てる」の二つの目標に基づいた指導計画の作成と、その実践が行われていたかったことである。この二つの目標は、日本人が在日を承認することを通して差別のない学校文化を実現し、その結果として在日が主体的に自らの将来に向けて行動することができることであると考えられる。この目標を具体化するのであれば、日本人と在日がパートナーとして協同し、差別のない学校文化づくりに参加できる教育方法について考えることが必要となってくる。

異なる民族が協同し、差別のない学校文化の創造に向けて、次の二つの考え方から示唆を得ることができる。第一は、ジョンソンとジョンソンの協同学習の考え方である。ジョンソンとジョンソンが人間関係に関するアプローチを提唱していることは前章で論じた通りである。ジョンソンとジョンソンの協同学習の目的をまとめると、(1) 偏見と差別の排除を通してマイノリティとマジョリティの間の関係を改善すること、(2) 多様な人々との活動に参加することのできる能力を育成することである。(1)の目的に関しては、韓国・朝鮮に対する肯定的なイメージを構築することや、民族差別の原点としての日朝関係史を学ぶことで陶化小において実践されてきた。(2)の目的は、子どもたち自ら、民族の違いを越え、協同して共に活動することである。こういった態度は、自らが差別を克服し、民族的差異と関わることのできる能力として重要である。陶化小では、(2)の目的に基づいた指導計画は開発されていない。

ジョンソンとジョンソンは、(2)異なる民族と協同できる態度の育成に向け、協同学習を用いた実践の可能性を提示した。協同学習は、单元ごと、あるいは授業ごとに、集団を構成し共通の目標を設定し、その目標に向けて活動する。陶化小の外国人教育は、教師主導で展開されており、在日と日本人が共通の目標に向けて取り組む方法を用いた実践は行われていない。民族差別を乗り越える態度を育成するのであれば、子どもたちが主体となって、多様な人々と協同しつつ意思決定をすることのできる指導方法を取り入れることが適切である。ジョンソンとジョンソンによれば、協同学習は、互いを手助けし、支え、努力を励まし合うことによって個々の到達に向けて協同して取り組むことのできる能力が養われる(Johnson & Johnson, 2002, p.134)。こうした活動は、クラスにおいて民族差別を越えた日本人と在日との人間関係を築く可能性がある。

第二は、スリーターとグラントの社会構造の平等に向けて活動することのできる市民の育成をめざす「多文化的な社会公正をめざす教育」(Multicultural Social Justice Education)の考え方から示唆を得ることができる。スリーターとグラントは、多文化教育としての教育実践を五つのアプローチに分類している。陶化小の指導計画は、五つのアプローチの中の「人間関係」である。「試案」の中で挙げられていた民族差別をなくすための態度の形成については、「人間関係」だけでは到達することはできない。その際、五つのアプローチの中でも、「多文化的な社会公正をめざす教育」に注目すべきである。このアプローチの特徴は、差別のない社会づくりに参加するための知識と技

能を養うことである。

このアプローチには、大きく三つの特徴がある (Sleeter & Grant, 2009, pp.210-218)。第一は、民主主義を実践することのできる能力を育成することである。これは、民主主義について理解するだけでなく、日常の様々な出来事が民主的であるかどうかを評価することのできる批判的思考の育成である。第二は、自分自身の生活環境を分析することである。これは、子どもたちの日々の経験における民族などの差別に関わるトピックを批判的に捉え、それらの中の問題点を明らかにすることである。第三は、社会活動の技能を育成することであり、抑圧や差別をなくすためのシミュレーションやロールプレイングを通して行動するための態度を育てることである。そして、このアプローチは、民族に限定するのではなく、ジェンダー、階層、人種といった問題も横断的に取り上げ、教育内容を構成する。また民族、人種といったように人々を集団にするだけでなく、そこに所属する個人の多様性にも目を向ける。「多文化的な社会公正をめざす教育」は、子どもたちの学校や地域における日常の問題と関連づけながら差別をめぐる問題について批判的に捉え、差別をなくすための方策を子どもたち自身が明らかにしていくのである。

陶化小の校内研究では、韓国・朝鮮の文化に対する肯定的イメージを構築することと、日朝関係史を通して在日を理解するための学習を行っていた。しかし、校内研究においては、日本人と在日が協同しながら差別のない学校文化を創造していこうという発想は乏しかった。日本人と在日がよりよい人間関係を形成し共に差別の克服を目指す学校文化を創造するのであれば、そのための教育方法の在り方を考える必要がある。その際、本章で取り上げたジョンソンとジョンソンの協同学習と、スリーターとグラントの「多文化的な社会公正を目指す教育」は意味がある。

6. おわりに

陶化小の校内研究では、二つの特徴のある実践を行っていた。第一は、子どもたちが韓国・朝鮮に対する肯定的なイメージを形成することのできる民話、歌、遊びなどの教材を用いた実践を行っていたことである。第二は、日朝関係史を教材として、在日が日本に存在する背景や、本名を名乗れない現状について、その歴史から在日についての理解を深めることである。陶化小では、これらの教材を通して、在日に対する偏見や誤解を排除し、民族による蔑視やいじめのない学校づくりを試みていた。1981年に「試案」が策定されたのと同時に開始した陶化小の校内研究には重要な意味がある。

今日、外国人教育において、中国やフィリピンといった様々な国にルーツの子どもたちをめぐる実践や研究が積み重ねられている。本論で明らかにした陶化小の校内研究の成果と課題を踏まえると、これからの外国人教育の課題は、次の2点にまとめることができる。第一は、陶化小の校内研究で取り組まれたように外国人の子どもたちにルーツのある国に対する偏見を軽減することのできる教材を開発することである。1990年代に入って、京都市の小学校では陶化小の校内研究で開発された教材と同じ韓国・朝鮮の遊びを取り入れた実践を行った。その実践の中で、日本人の子どもは、その遊びを「面白かった」と言い、そのことに対して在日の子どもは嬉しかったという感想を述べた¹⁸⁾。このように、外国にルーツのある子どもの国の教材を用いることは、日本人がその国に対する肯定的なイメージを構築することができるのと同時に、外国にルーツのある子どもたちの自尊感情にも影響を及ぼすのである。第二は、差異を認めながらも、異なる国にルーツのある人々とより良きパートナーとして協同できる学校文化の構築が必要である。その際に、

本論で取り上げたジョンソンとジョンソンの協同学習と、スリーターとグラントの「多文化的な社会構成をめざす教育」は、可能性のある考え方である。

注

- 1) 外教研は、毎年8月に「ノリマダン」という韓国・朝鮮の遊び、言葉、音楽を体験する小学生を対象としたイベントを行っている。こうしたイベントの中でも陶化小で開発された教材も用いられている。
- 2) 外国人教育研究推進委員会の調査のまとめに関する資料（小栗栖直樹所蔵資料）
- 3) 『九条思潮 Part5 東九条地域生活と人権を守る会基調』、東九条地域生活と人権を守る会、1982、pp.5-10。
- 4) 1960年に京都韓国学園（現・京都国際学園）の移転が決まったが住民の反対運動により移転は大幅に遅れた。移転先における新校舎は1984年8月に完成した。
- 5) 外国人教育研究グループ 神内貴司、大野利和、浜口由紀男、中嶋弘行、松下佳弘『平成11年（2000年度）京都市教育研究グループ奨励事業「外国人教育」外国人教育の具体的展開—民族や国籍の違いを認め、共に生きる意識を育てる』、p.2。
- 6) 同上、p.2。
- 7) 小栗栖直樹へのインタビュー、2012年1月12日（土）京都市。
- 8) 「外国人教育研修会（第1回）」1982年7月14日、外教部。
- 9) 京都市立陶化小学校『昭和56年 陶化教育の歩み』1981年、p.3。京都市立陶化小学校『昭和57年 陶化教育の歩み』1982年、p.3。
- 10) 「生徒指導における外国人教育への視点」陶化小学校小栗栖直樹（1982年）。
- 11) 例えば、2014年8月に開催された全国在日外国人教育研究集会（広島大会）のテーマとして「多文化共生社会実現のための教育を創造しよう」があげられた。大会ではクラスの子どもたちの出身国や民族の多様性尊重に向けた教育の在り方が報告された。
- 12) 京都市立陶化小学校『昭和56年度 陶化教育のあゆみ』、pp.21。
- 13) 京都市立陶化小学校『昭和58年度 陶化教育のあゆみ』、pp.21-22。
- 14) 京都市立陶化小学校「昭和58年度 研究のまとめ」、p.20。
- 15) 京都市立陶化小学校「昭和58年度 研究のまとめ」、p.17。
- 16) 同上。
- 17) 中村光伸（1982）「社会科指導案」『昭和57年度陶化教育のあゆみ』、pp.12-14。
- 18) 松下佳弘（1995）「せんせい、韓国語であいさつをしてもいい？—3年・4年での在日韓国・朝鮮人の子どもとのかかわりから」『1994年度外国人教育研究集会—民族差別をなくすことをめざす創意ある実践の推進』京都市小学校外国人教育研究会。

引用および参考文献

- 1) 稲富進著、中村水名子編（2008）『違いを豊かさに』三一書店。
- 2) 小栗栖直樹（1982）「在日朝鮮人教育と私」『第3回 在日朝鮮人教育研究全国集会資料 在日朝鮮人教育運動と実践の発展をめざして』在日朝鮮人教育研究会全国協議会準備会、pp.24-28。
- 3) 中島智子（1981）「在日朝鮮人教育における民族学級の位置と性格—京都を中心として」『京都大学教育学部紀要』（27）、京都大学教育学部、pp.117-127。
- 4) 松下佳弘（2004）「京都市における在日韓国・朝鮮人教育の成立までの経過—1981年『外国人教育の基本方針（試案）』策定の前史として」『世界人権問題研究センター研究紀要』第9号、pp.115-136。
- 5) 原野司郎（1994）「1.『京都市立学校外国人教育方針』策定までのあゆみ」『在日のいま—京都発』全朝教京都、pp.50-63。
- 6) 藤岡秀正（2000）「第三回定例研究会 京都市の公教育における外国人教育」『KIECE民族文化教育

研究』(3) 京都民族文化教育研究所、pp.112-140。

- 7) Grant, C. A. & Sleeter, C. E. (2010). Race, Class, Gender and Disability in the Classroom. In J. A. Banks & C. A. M. Banks (Eds), *Multicultural Education: Issues and Perspectives* (7th ed.). Hoboken, NJ: Wiley.
- 8) Sleeter, C. E. & Grant, C. A. (2009) *Making Choices for Multicultural Education: Five Approaches to Race, Class, and Gender* (6th ed.). Hoboken, NJ: Wiley.
- 9) Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (2002) *Multicultural Education and Human Relations: Valuing Diversity*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.

(2015年3月31日提出)

(2015年6月10日受理)

資料 陶化小学校の外国人教育（1981年から1983年）

番号	学年	教科／特別活動・単元（主題）名	教育内容・目標	(1)	(2)	その他
1	1	国語・おむすびころりん	朝鮮民話「トラよりこわいくしがき」を読み朝鮮に親しむ		③	
2	1	国語・大きなかぶ	朝鮮民話「おばあさんのとらたいじ」を通して日本と朝鮮の類似点に気づく。		③	
3	1	国語・てんぐとおひやくしょう	朝鮮民話「トケビとけちけちじいさ」を読み朝鮮にも伝説の魔物がいるのを知る		③	
4	1	国語・花いっぱいになあれ	朝鮮の童話、絵本を読み朝鮮の子どもたちの様子を知る。		③	
5	1	国語・ひさの星	美しい心を持つ人の尊さを知る。			○
6	1	国語・モチモチの木	人間の素晴らしい行動が優しいさから生まれることを知る。			○
7	1	社会・がっこうの一日	どこの国にもあいさつがあることを知る。		③	
8	1	社会・がっこうたんけん	民族学級への関心を高める		③	
9	1	社会・わたしのうちががっこうからかえって・うちのしごと	家族によって食生活に違いがあることを知る。韓国の食べ物を知る。		③	
10	1	社会・あそびとくらし	朝鮮の遊びにふれ、国によって遊びが異なることを知る。		③	
11	1	図工・おはなしのえ	朝鮮民話に描かれた風景、トラ、民族衣などを見て、朝鮮に親しみをもつ。		③	
12	1	音楽・あそびながらうたいましょう	朝鮮語のうたを歌い、言葉の響きに親しむ。		③	
13	1	道徳・みんななかよく	朝鮮民話「青がえる」を読み、朝鮮にも親孝行を大切にしていることを知る。		③	
14	2	国語・赤いろうそく	朝鮮民話「気のいいトラ」を読み朝鮮に親しみをもつ。		③	
15	2	国語・かわいそうなぞう	戦争は人間の幸せを壊すものであることを知る。			△
16	2	国語・かさこじぞう	朝鮮民話「さんねんとうげ」を読み朝鮮に親しみをもつ。		③	
17	2	社会・田や畑で働く人々	朝鮮も米を主食としており、米づくりが盛んなことを知る。		③	
18	2	社会・海で働く人々	朝鮮も漁業に従事している人が多く、漁業が盛んなことを知る。		③	
19	2	社会・郵便の仕事をする人々	朝鮮への郵便物が多いことを知る。朝鮮の代表的な名前を知る。		③	
20	2	図工・お話をきいて	朝鮮民話の話（「鬼のチョッキ」）を絵で表現し、朝鮮に親しみをもつ。		③	
21	2	音楽・楽しくうたおう	朝鮮語のうたを歌い、その響きに親しむ。		③	
22	2	道徳・世界の子どもが（人類愛）	国境を越えた助け合いの気持ちを育てる。			○
23	2	道徳・なかよく（信頼・友情）	友だちと仲良くし、互い励ましあおうとする。			○
24	2	学級指導（図書館指導）・花さき山	やさしさの大切さを知る。			○
25	3	国語・いろいろな本を読もう（朝鮮民話）	朝鮮民話を読み感想をもつ。外国の民話に興味をもつ。		③	
26	3	国語・母さんの歌	朝鮮人も数多く被曝しており今日も苦しんでいることを知る。			△
27	3	国語・ふえをふく岩（朝鮮民話「トラたいじ」）	朝鮮の情景を想像し、朝鮮民話と日本民話の類似点を見つけ親しみをもつ。		③	
28	3	国語・夕鶴（朝鮮民話「仙女のはごろも」）	朝鮮民話の文章の美しさを知る。日本民話との類似点を見つける。		③	
29	3	社会・京都市のうつりかわり	織物、染色などの伝統産業には多くの朝鮮人が従事してきたことを知る。		③	
30	3	社会・市民のつくりだすもの（京都）	織物、染色は朝鮮から伝えられ技術者の交流に気づく。		③	
31	3	図工・物語の絵	朝鮮の話を絵に表現する。朝鮮に親しみをもつ。		③	
32	3	音楽・メヌエット長調（鑑賞）	伽那琴を通して朝鮮の音楽に親しみをもつ。		③	
33	3	音楽・ポロネーズ（鑑賞）	朝鮮民話を通して朝鮮の音楽に親しみをもつ。		③	
34	3	道徳・わけへだてなく（公平・公正）	自分の利害や好き嫌いとらわれず、相手の立場を理解して仲良くする。			○
35	3	道徳・人を愛する心（人類愛）	言葉や風習の違いを理解し、朝鮮の友だちに親愛の気持ちをもち仲良く助け合う。		③	
36	3	学級指導・友だち（1）（2）	先入観や外見だけで人を判断しないようにする。			○
37	3	学級指導・朝鮮のくらしと日本のくらし	朝鮮の風俗習慣や行事を知り、日本との類似点と相違点を考え、朝鮮の人々の暮らしを正しく知る。		③	
38	3	学級活動・日本の遊びと韓国の遊び	日本と朝鮮の遊びの類似点を知り双方の国のつながりを知る。		③	
39	3	学級指導・本名を大切にしよう	朝鮮人には二つの名前があることを知る。友だちの本名を知り大切にす。朝鮮民族が本名を大切にしていることを知る。		③	
40	4	国語・一つの花	戦争が個人の権利と幸福を奪うことを知る。			△
41	4	国語・言葉の学習漢字の音と訓	中国、韓国といった国でも漢字を使っていることを知る。		③	
42	4	感想をくらべて	お互いに相手の立場や考えを大切にす態度を育てる。			○
43		国語・あいさつの言葉	朝鮮の挨拶の言葉を知る。習慣の似たところについて考える。		③	
44	4	社会・わたしたちの開ききょう土	昭和初期にできた京都の川の改修工事や鉄道工事には、多くの朝鮮人の労働者によって行われたことを知る。		③	
45	4	社会・さまざまな土地のくらし（沖縄の人々のくらし）	戦争の影響によって権利や生活が奪われ、それが未だ解決されていないことを知る。			△
46	4	図工・物語の絵	朝鮮の物語を絵で表現し、朝鮮の様子に親しみを持つ。		③	
47	4	音楽・白鳥	伽那琴を通して韓国の音楽に親しみをもつ。		③	

番号	学年	教科／特別活動・単元（主題）名	教育内容・目標	(1)	(2)	その他
48	4	学級指導・友だち（だからわらい）	いじめられている者に対して無関心であったり、黙認することもいじめであることに気づく。			○
49	4	学級指導・お正月	日本と朝鮮の正月の類似点と相違点を明らかにし、朝鮮の人々の暮らしを知る。		③	
50	4	学級指導・外国の人	民族には独自の文化があることを知る。それらを認め合うことが差別や偏見のない社会づくりに必要であることを知る。		③	
51	5	国語・かべの中	外国で生活する人の気持ちをを知る。			○
52	5	国語・お母さんの木	反戦平和の気持ちの大切さに気づく。			△
53	5	国語・漢字の由来と部首	漢字が朝鮮を経て日本に伝わってきたことを理解する。		③	
54	5	国語・言葉と事実	言葉の使い方によって、人を傷つけたり差別することがあることに気づき、言葉の使い方を考える。			○
55	5	社会・変わっていく農業日本の農業の特性（狭い耕地）	韓国の農業も日本の農業と同じ状況であることを知る。		③	
56	5	社会・わたしたちの食生活と水産業（日本人のたんぱく源）	水産物の輸出入を通して日本と朝鮮の関係を理解する。		③	
57	5	社会・日本の工業と国民の暮らし・鉄をつくる工場・わが国の製鉄所・古くから続く手作りの工業	日本の貿易相手国（朝鮮）について調べて、特徴を理解する。		③	
58	5	社会・変わりつつある工業加工貿易の問題	大韓民国と日本の貿易における関係の深さについて学ぶ。朝鮮民主主義共和国との貿易における関係についても知る		③	
59	5	社会・わたしたいの住んでいる国土	日本と朝鮮半島の気候が似ていることを知る。		③	
60	5	図工・物語を絵にする（ねずみの王様）	朝鮮の民話を絵で表現し、朝鮮の昔ばなしに親しみをもつ。		③	
61	5	図工・朝鮮だこ	朝鮮の穴あき型の凧に先人の知恵と工夫があることに気づく。		③	
62	5	学級指導・読書指導「アンクル・トムさん」（岡本良雄著）	皮膚の色や外見で偏見や差別をしていないかを話し合い、相手を認め合うことの大切さを知る。			○
63	6	国語・川とノリオ	反戦平和の気持ちの大切さに気付く。			△
64	6	社会・大むかしの暮らし（米づくり）	農耕技術や農機具が中国や韓国から伝来したことを知る。		③	
65	6	国語・外来語の話	日本に及ぼす外国文化の影響を知る。		③	
66	6	社会・大和朝廷	朝鮮から技術や学問をもって渡来した人は、日本の政治、産業、文化において指導的役割を担っていたことを知る。		③	
67	6	社会・武士の政治（元との戦い）	元は、朝鮮を日本侵略に利用したが、朝鮮での抵抗もあり、その力が弱まり、日本への侵略に失敗したことを知る。		③	
68	6	社会・武士の政治（室町時代）	室町幕府が倭寇を取り締まり朝鮮との国交を進めたことを理解する。		③	
69	6	社会・天下統一と鎖国（朝鮮出兵）	朝鮮侵略が朝鮮人民を苦しめ、国土を荒らし、日本国民も苦しめる結果になったことを知る。		①	
70	6	社会・天下統一と鎖国（鎖国）	江戸幕府の成立後、日朝の国交が開かれ、朝鮮通信使が派遣されたことを知る。		③	
71	6	社会・近代の日本（日清・日露の戦争）	二つの戦争は、日本が中国と朝鮮の土地、人民を支配する戦いであったこと。韓国併合、皇民化政策によって本名を名乗れないなどの問題を現在も残していることを知る。	①	①	
72	6	社会・近代の日本	韓国併合における朝鮮の人々の苦しみについて考える。	①	①	
73	6	社会・現代の日本（社会運動・関東大震災）	警察が誤ったうわさを流布したため朝鮮人の人権を無視した事実をおさえる。	①	①	
74	6	社会・現代の日本（戦争への道）	今日の在日コリアンが日本の植民地支配によって、日本に渡ってきたことを知る。	①	①	
75	6	社会・現代の日本（苦しい国民生活）	創氏改名によって日本名を強要され、日本語を強要された事実を知る。本名の尊さを知る。	①	①	
76	6	社会・現代の日本（日本の降伏）	36年間続いた日本による支配が終わり、朝鮮人たちが解放された喜びに気づかせる。	①	①	
77	6	社会・現代の日本（世界の動き）	南北対立と分断の悲劇を知らせる。		③	
78	6	社会・これまでの日本これからの日本	生活・職業などの観点から民族差別の現状に目を向け、人権回復と正しい国際関係の確立の必要性に気づく。			○
79	6	図工・人物画（チマチョゴリを着た友だち）	朝鮮の民族衣装の美しさを感じ取る。		③	
80	6	図工・切り絵（仙女のはごろも）	民族衣装の美しさを感じ取る。日本と朝鮮の民間伝承における共通性を理解し、朝鮮の文化に親しみをもつ。		③	
81	6	家庭・わたしたいのすまい	地域によって住まいが異なることを知る。		③	
82	6	特別活動（学級会）・本をつくろう（作業活動）	本を作る活動を通して、協力し、励ましあう。			○

*次の文献をもとに作成した。京都市立陶化小学校『昭和56年 陶化教育の歩み』、京都市立陶化小学校『昭和57年 陶化の歩み』、京都市立陶化小学校『昭和58年度 研究のまとめ』

②の③は、日本と韓国・朝鮮の共通点を強調した実践である。③は、日本と韓国・朝鮮の交流に焦点を当てた実践である。その他の△は戦争をテーマにした実践である。

The Character of Foreign Student Education focusing on Zainich Koreans in the Early 1980s:

The Preliminary Plan for a Fundamental Policy for Foreign Student Education and the In-school Study of Touka Elementary School in Kyoto City

ISODA, Mitsuko

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

The aim of this paper is to clarify the knowledge and skill of foreign student education connected with eliminating discrimination against Zainich Koreans by means of analyzing lesson plans which were developed in the early 1980s in public elementary schools in Kyoto. In 1981, the Preliminary Plan of Fundamental Policy for Foreign Student Education was released in Kyoto City. Touka public elementary school in Kyoto started to conduct a research project for foreign student education from 1981 simultaneously with the presentation of the Preliminary Plan. The present paper focused on 82 lesson plans which were developed through a research project from 1981 to 1984. The following two points resulted from this paper: (1) Teachers tended to use Korean folk tales, traditional games and cultural events as materials. Also, when teachers use these materials, they placed stress on the similarities and differences. Students from first grade to fourth grade were taught using these materials. (2) Teachers also tended to prepare historical materials and contents concerned with enforcing the change of name. Children were expected to acquire knowledge and skills so that they could acknowledge and make good relationships. However, foreign student education of Touka elementary school has its limits. In short, there are not any lesson plans which were set goals for Zainichi Koreans to overcome discrimination. Neither is there any mention of both Japanese and Zainichi Koreans working together to reduce discrimination. In order to make lesson plans according to the above goals, it is necessary to rethinking about teaching methods for creating a school culture in which both Japanese and Zainichi Koreans children work together to remove discrimination. When teachers make lesson plans of foreign student education, the cooperative learning by Johnson & Johnson (2002) and Multicultural Social Justice Education by Sleeter and Grant (2009) are implicated useful education method.

Keywords: Fundamental Policy for Foreign Student Education, foreign student education, Zainich Koreans, multicultural Education